症例は 30 歳男性で 3 年前に甲状腺癌の全摘術と頸部リンパ節廓清術を受け，病理標本から乳頭腺癌の濾胞型と診断されている．

術後，肺転移巣への ^{131}I 治療を目的として当科を受診し，以後，現在迄に肺病巣および，頸部リンパ節転移巣の ^{131}I 治療を 3 回施行している．その都度，TSH を 20～30 単位を用いているが ^{131}I 治療時の血清 TSH は，甲状腺剤を中止するため高値を呈するが，今回，抗 TSH 抗体測定時は甲状腺剤 (T4) を投与中で，正常範囲であった．

抗 TSH 抗体測定には，ヒト TSH 測定用 RIA キットを用い Bound と Free の分離には PEG を用いた．本症例の抗 TSH 抗体測定値は 6 回の検査で 0.049±0.019 m*l* となり，コントロール群 35 例の平均値 0.0017±0.005 m*l* に比し高値となった．

ヒト RIA キットを用いた TSH 抗体の測定は，感度が良く簡易な検査法であり，TSH を使用するにあたり，前もって測定すべき検査法と思われる．

21. 結節性甲状腺疾患における ^{201}Tl-chloride scintigram と ultrasonogram について

山中　千里　　原　　裕子
奈良　成子　　牧　　正子
日下部きよ子　山崎統四郎
松永和歌子　　鈴木　恵子
成松　明子
（東京女子医大・放）
瀬木　和子
（同病院・病理）

^{201}Tl-chloride シンチグラフィおよび超音波検査を施行し，手術により確認された結節性甲状腺腫 23 症例，30 結節について，両検査の有用性について検討した．

評価法として寄与度を定め，比較のため触診および ^{123}I シンチグラフィに関しても算出した．

^{201}Tl シンチグラフィおよび超音波検査の結節の局在診断に対する寄与度は，触診と ^{123}I シンチグラフィにくらべて劣ると考えられる．一方，質診断に関しては，のう腫と充実性腫瘍，のう胞状変性の有無は，超音波検査はもとより，Tl シンチグラフィでも中ぬけのドーナッツ状を呈することからある程度有用であり，良性・悪性の鑑別に関しては，1 つの検査では寄与度は低くとも合わせて判断すれば有用である．特に慢性甲状腺炎や腺腫様甲状腺腫に合併した腫瘍の診断に際しては，^{201}Tl シンチグラフィおよび超音波検査法はきわめて有用であると考えられる．

22. aberrant thyroid gland の CT と RI 診断

吉川　宏起　　町田喜久雄
板井　悠二　　前原　忠行
荒木　　力　　八代　直文
古井　　滋　　町田　　徹
田坂　　晧
（東大・放）

異所性甲状腺の診断には，RI シンチスキャンが不可欠な検査である．しかし、甲状腺組織は，そのヨウ素含有率の高さ故に，CT にて他の軟部組織と比較的容易に区別が可能である．従って，舌根部あるいは前頸部のように存在部位が視診，触診で予想がつく場合には，その腫瘤に甲状腺組織が含まれているか否かの診断に CT が利用できる．

最近 5 カ月間に，3 例の異所性甲状腺を有する症例の，RI シンチスキャンおよび CT スキャンを行ない，RI シンチグラムにて描出した 5 カ所の異所性甲状腺組織のうち 4 カ所を CT にて固定し得た。それらの CT 値の平均は，118.2±20.8 (Houns field 値) で，CT にて固定し得なかった 1 カ所の甲状腺組織は，径約 1cm のものであった．

CT の利点は，侵襲，被曝量共に比較的少なく行なえること，横断面の画像が得られ，周囲の組織・器官との関係についての情報が得られることが挙げられる．一方体動などによる artifact が生じやすいこと，存在部位の予想がつかぬ場合には不適であることなどの欠点を有する．

Presented by Medical*Online